二つのマウルブロン小説

―『車輪の下』から『ナルツィスとゴルトムント』へ―

新　宮　　潔

はじめに
Ⅰ　友情と愛情
Ⅱ　人類の母イヴ像と聖母マリア像
Ⅲ　父権と母権とのはざまで
Ⅳ　マリアブロンへの帰還と母への回帰
むすび
付記

はじめに

ヘルマン・ヘッセは生涯にマウルブロン（Maulbronn）神学校を舞台とした作品を二つ書いている。ひとつは日本人読者の多くが一度は手にした『車輪の下』（Unterm Rad）であり、もうひとつが、中世カトリックの修道院を描いた『ナルツィスとゴルトムント』（Narziß und Goldmund）であるが、二つの作品のあいだには約四半世紀の時間的な隔たりが存在する[1)]。一方、郷里の優等生としてこの神学校への入学を果たしたものの、半年後には発作的に逃亡、その二ヶ月後には退学となったという顛末は、ヘッセ自身の人生にとっては一年足らずの出来事であった。それにもかかわらず、いみじくもA・ゲースが指摘するように、「より高次な意味において、おそらく彼（ヘッセ）はこのマウルブロンを一度たりとも離れたことがなかった」[2)]と考えられる。かつてマウルブロンがシトー派の修道院であったこと、『ナルチスとゴルトムント』に描かれる「マリアブロン」（Mariabronn）も中世の修道会所属の修道院であること、これ以後の主要作品、『東方巡礼』（Morgenlandfahrt）においても、また最後の大作、『ガラス玉演戯』（Das Glasperlenspiel）においても、いわゆる秘密結社やある種の修道会的な組織が作品の中心に据えられている点から、ヘッセが定住地を持たない放浪者の生活に、修道院のような一つの完結した

1）『車輪の下』は1903年に執筆され、1905年に刊行された。
　『ナルツィスとゴルトムント』は1927年４月に執筆が開始され、1929年１月に初稿が完成し、1930年に刊行された。
2）Hrsg. von Volker Michels, Über Hermann Hesse 1. Band, Suhrkamp Verlag, 1979, Frankfurt a. M., S. 325.

小宇宙的世界を対置していることがわかる。本論文では、このような持続性を持ち続けたマウルブロン体験を通して、ヘッセが求めていたものが何であったかという疑問について考察を加えたい。

Ⅰ　友情と愛情

A・ゲースは、「（マウルブロンのような）寄宿学校が本質として備えている大いなる二つの賜物、すなわち、魅力と幸福、危険と苦悩をも含めた教師と生徒の絆の体験、そして友情の原体験とがヘッセの作品を決定付けている」[3]と言う。『車輪の下』のハイルナーとハンスの友情、ナルツィスとゴルトムントの師弟関係と友情、確かに男性同士の友情は両作品を貫く最も重要な、しかも正面に据えられた明確なモチーフである[4]。『車輪の下』については、二人の主人公の友情が、「与える者」（ハンス）と「奪う者」（ハイルナー）という一方的関係であることなど、すでに論文等で扱っているので繰り返しを避けたいが、友を失うことと友のために自らを犠牲にすること、さらに友を決定的に失うことの苦しみが見事に描き出された作品である。ただし、当時の学校制度上、それはあくまでも思春期の少年たちの世界に限定されている。修道院付属学校である「マリアブロン」についても、描かれる友情の世界は言うまでもなく男性のあいだに限られる。

その一方で、両作品のあいだの決定的な相違が教師と生徒との関係に存在する。『車輪の下』においては、ハンスを誤解する教師はいても、理解しようとする者はヴィードリヒという「情け深い助教師を除いて」[5]一人もいない。ハイルナーにとっては彼を理解しようとする教師は皆無であり、彼のようなある種の「天才」（Genie）と「教師団」（Lehrerzunft）との間には「どうしようもない深い裂け目がある」[6]とヘッセは言う。一方『ナルツィスとゴルトムント』では、優れた学識を備えたナルツィスこそが修道院学校の生徒ゴルトムントを真に理解する若い教師助手であり、そのナルツィスがゴルトムントを修道院から外の世界に旅立つことを促す導き手となるのである。しかもナルツィスは，彼の生徒であるゴルトムントを自分に最も欠けたものを身につけた一人の友として扱い、二人の友情のあるべき姿を説いてつぎのように言う。「どんなやりかたをとっても僕たちは互いに近づくことはないのだ。〔……〕太陽と月、海と陸が互いに近づくことがないのと同じで、互いに近づきあうことが僕たちの使命ではない。ねえ、君、僕たち二人は太陽と月、海と陸なのさ。僕たちの目的は互いに融和することではなく、互いに認め合い、そして相手のあるがまま、つまり自分とはちがう反対のものや補足物を見てとって、それを尊敬することを学ぶことだ」[7]。

3）Ibid.
4）雑誌掲載の際には、『ナルツィスとゴルトムント』に「ある友情の物語」という副題が付けられたことさえある。
5）Jubiläumausgabe zum hundertsten Geburtstag von Hermann Hesse, 1. Band, Suhrkamp Verlag, 1982. Frankfurt a. M., S. 269.
6）Ibid., S. 249f.
7）Jubiläumausgabe zum hundertsten Geburtstag von Hermann Hesse, 6. Band, Suhrkamp Verlag, 1982. Frankfurt a. M. ,S.46.

ナルツィスの言葉が示すように、この作品においては、師弟関係から互いに認め合う真の友情へという、友情の発展と深化の過程が顕著に見られる。むろんそのためには、修道院を脱け出しナルチスと別れた後のゴルトムント個人の成長過程が不可欠である。放浪生活と女性遍歴に明け暮れながらも、彫刻という芸術の技を身につけたゴルトムントのことに思いを馳せつつ、マリアブロン修道院長となっていたナルツィスは、「〔……〕青春が始まって以来自分が友を導き教えたすべての場面を思い起こした。友は感謝をもってそれを受け入れ、ナルツィスが優越した導き手であることを常に認めた。それから彼は、試練に満ちた人生の嵐と苦悩から生まれた作品を、そっと差し出したのである。それは言葉でも、教えでも、説明でも、警告でもなく、純粋に高められた人生であった」[8] ことを痛感し、ゴルトムントが彼と対等な友人、ある分野では彼を凌ぐ存在となっていることを確信している。そういう意味において、この作品はゴルトムントを主人公とした「発展小説」（Entwicklungsroman）という側面をもっている。『車輪の下』のハイルナーも、出会いの時期が異なっていればハンスのよき導き手となりえたかもしれないが、この時点ではハンスの「没落」のきっかけを作った一人でしかありえなかった。したがって、約二十五年の時を経て、ヘッセは修道院付属学校におけるある種同性愛的な雰囲気を含めた、若者同士の友情のひとつの理想像を描き出そうとしたという指摘も可能であろう。

しかし、ヘッセの作品の水面下では、性的なものから母性をも含めた「女性」の存在が一貫した大きな流れを形成していることも見逃せない。ヘッセ作品における「女性像」は、『車輪の下』のハンスの場合のように漠然とした未知の世界、切ない初恋と失恋の対象である少女像にとどまることが多い反面、『デミアン』（Demian）をはさんだ中期以降には、かなり赤裸々な性愛と深層心理の「グレート・マザー」のような女性像の存在が注目される。『デミアン』におけるベアトリーチェ像、エヴァ夫人といった「原型」（Urtyp）的な女性像が、『クラインとワーグナー』（Klein und Wagner）のテレジーナ、『シッダルタ』（Siddarta）のカマーラといった娼婦的な女性となり、『荒野の狼』（Der Steppenwolf）では、アニマ（Anima）的なヘルミーネと娼婦的なマリアという二人の女性となる。さらに「魔術劇場」（Magisches Theater）の場面では、かつて不完全な形で終った初恋を本物の恋愛として再体験するという試みが描かれる。

だがゴルトムントの女性遍歴におけるほど、ヘッセが作品の中で性と女性の問題に真正面から取り組んだことはなかった。性愛そのものをたとえば楽器演奏のような芸術的行為として追求しながら放浪するゴルトムントは、同時に、彼が愛した女性たちの姿を含めて、その目にとどめたものを彫刻という芸術作品の中で持続できる存在にしようとする。そしてペストによって荒廃した世界を体験し、あらためて制作意欲に目覚めて言う。「一体あの貴重な花を救う力や魔法はなかったのだろうか？　いや、そういう魔法はあったのだ。つまりその貴重な花が自分の魂の中で生き続け、自分によって形象化され、保存されることだ。彼は自分の魂がいかに多くの像によって満ちているか、死の国を通ってのこの長い旅がいかに多くの姿を自分の魂いっぱいに書き記したかを、驚きと歓喜をもって感じた。ああ、内面のこの充実はなんと自分をどきどきさせることか。静かにそのことを思い出し、流出させ、永続す

8）Ibid., S.303f.

る像に変えることをなんと切望したことか！」[9]。もしゴルトムントがクヌルプのように単なる一放浪者として生涯を終えたならば、ナルツィスとの友情は導き手と導かれた者との関係という、偏った不完全なものにしかならなかっただろう。したがって、女性遍歴を重ねる元修道院学校生徒が彫刻家という芸術家となってはじめて、ナルツィスの「知」とゴルトムントの「愛」とが互いに等価の存在として均衡を保つことになるのである。再会をはたした二人の思いは、まさにナルツィスがかつて二人の友情について語った内容を確認するものであった。「彼（ゴルトムント）はナルツィスに対して、いまや自分にふさわしい関係を見いだした。もはや依存の関係ではなく、自由な相互的な関係を。いまや彼は卑屈にならずに、ナルツィスのすぐれた精神のもとに客となることができた。相手が自分の中に対等な存在、創造者を認めてくれたからである。自分を彼に示すこと、彫刻作品で彼に自分の内面の世界を表現して見せることを彼は、この旅の間中次第につのる渇望をもって楽しみにした」[10]。そのゴルトムントに対し、ナルツィスは再び彼のもとから旅立った友をふり返りながら「僕自身はその知識、修道院の規律、弁証法をもってしても、なんと貧しいことであろう！」[11]という思いにいたり、ゴルトムントが去った修道院の中にはもはや誰一人として彼と対等な人間が存在しないことに苦悩し、孤独な戦いを続けていく。

Ⅱ　人類の母イヴ像と聖母マリア像

ヘッセはゴルトムントの人生を通して男女の愛の秘密を追究するだけでなく、その結果としての出産や死にいたるまでを、母性が有する両極の要素、すなわちユングのグレート・マザーに言われる「産み－殺す」母として描き出そうとしている。後にニクラウス親方の下で若きナルツィスの姿を聖ヨハネ像に彫り出していたゴルトムントは、女性との愛と芸術とについて思考をめぐらしながら、その本質的な原理を予感するにいたる。

> 生命の母は、愛あるいは喜びと呼ぶことができるが、それはまた、墓と消滅とも言える。母はイヴであった。幸福の源泉であり、死の源泉であった。彼女は永遠に生み、永遠に殺すのだ。彼女の中では愛と残酷とが一つであった。そして彼女の姿は、彼が自分の中で長く抱いていればいるほど、比喩となり、聖なる象徴となった。〔……〕彼は、言葉や意識をもってではなく、血のより深い知恵によって、自分の道が母へ、快楽へ、死へと通じていることを知っていた。精神、意志といった生の父性的側面は彼の故郷ではなかった。そこにはナルツィスが住んでいた。そしていま、初めてゴルトムントは、友の言葉を完全に読み取り、理解し、友の中に自分と対立する存在を見た。そしてそれをヨハネ像の中で、形象化した[12]。

9）Ibid., S.227f.
10）Ibid., S.274f.
11）Ibid., S.304 und vgl. ibid., S.303f.
12）Ibid., S.172.

そして、母性と父性という相対立する原理が芸術を成立させていると理解し、「つまり、芸術は、父の世界と母の世界、精神と血の結合したものなのだ」[13] という認識に達する。そのような芸術作品として、彼は人類の母イヴの像をいつか完成させることを夢見、「ニクラウス親方が、いくつかのマドンナ像に中に、痛々しい聖母像を、ゴルトムントが超えられそうにないほどの、完璧さと表現力の強さによって表わしたように、彼自身もいつかさらに円熟し、技量をさらに確かなものにしたなら、世俗の母、イヴの像を、もっとも懐かしく、もっとも愛する聖なるものとして、彼の心のうちにあるとおりに、作り上げたいと望んだ」[14] のである。

ゴルトムントを放浪者から芸術家の道に導いたもの、それがこのニクラウス親方の手になる一体の聖母像との出会いであった。ある修道院に泊まった翌朝、彼がこれまでの放浪生活において犯さざるをえなかった罪の数々、とりわけ心ならずも遍歴学生ヴィクトルの命を奪った罪を、一人の神父に懺悔し、その言葉に従い祈りをささげた後、聖堂の中の小さな礼拝堂に安置された聖母マリアの像にひきつけられる。彼の懺悔に耳を傾けてくれた神父に、聖母像の作者であるニクラウス親方の工房を教えられたゴルトムントは、「人が変わったようになって、教会から出て行った。〔……〕木彫の甘美な聖像の前に立ったあの瞬間から、ゴルトムントは何かを得たのだ。つまりいままでに自分は一度も持ったことがなく、他人に対しては苦笑したり、うらやんだりしていたもの、すなわち目標を持ったのだ！〔……〕そしてひょっとするとやがて、彼のまったく支離滅裂だった人生は高い意味と価値をえるであろう」[15] という期待に満たされ、ある司教座都市に親方を訪ね、その弟子となることを希望する。試みにゴルトムントが描いたナルツィスのスケッチを見た親方は、彼が見習い徒弟となるには年をとりすぎていることやそもそも弟子をとらない方針にもかかわらず、自分の下で学ぶことを認め、芸術家になる手助けをしようと約束してくれる。そして数年が過ぎ、ゴルトムントはナルツィスの姿をキリスト十字架磔刑群像の一人である使徒ヨハネの像として完成し、親方にも認められる彫刻家となった。ヨハネ像を完成した後、再び放浪の旅に出たゴルトムントは、偶然に彼の命を救うこととなったナルツィスに伴われ、マリアブロン修道院に帰還する。そこで彼が最後に刻んだ木像も、かつての恋人リューディアの姿を写したマリア像であった。しかし、それらの像はゴルトムントが求め続けた真の女性の姿、人類全体の偉大な母であるイヴ像の途上にあるものであった。母の姿を内面において描きながらも、結局ゴルトムントは追い求めた彼の母やイヴ像を形に残すことができないままこの世を去り、彼の死の場面でこの物語は閉じられている。

さて、後に修道院長ヨハネスとなるナルツィスは、この作品においてゴルトムントの実父以上に父性を体現する精神の人である。また、『車輪の下』のハンスにもゴルトムントと同様に母親がおらず、小市民的父親と当時のドイツ社会における父権の象徴とも言える教師団が少年たちに相対している。厳格なプロテスタントの聖職者の家庭に育ち、神学校に入学し、やがては大学の神学部に進むことを定められたヘッセの少年時代は、マウルブロンからの逃亡と退学だけでは解消されえぬ父権との相克が運命づけられていたのである。その後の

13） Ibid.
14） Ibid., S.166.
15） Ibid., S.150f.

ヘッセが、キリスト教徒でありながらも仏教や儒教、道教、インドの神々といったアジアの宗教への接近を試みたこと、同じキリスト教でも聖母信仰を残すカトリックやオーソドックス（正教）に親近感を抱いていたこと[16] など、父権支配に対する母権の復権をさまざまに試みていたことをうかがわせる事実がある。実際、ヘッセが生涯を過ごしたのはスイスの中でもイタリア系の人々が住む州であり、彼が妻とともに埋葬されている墓地はカトリック教会に属している。そういう意味でも、マリー夫人との離婚、若いルート・ヴェンガーとの再婚と破局を経て、『荒野の狼』を頂点としたヘッセ個人の危機が、ニノン夫人という生涯の伴侶を得るとともに、『ナルツィスとゴルトムント』のような円熟味を帯びた作品に昇華されていくというのは、あくまでも表層的な現象でしかない。以下、二つのマウルブロン小説、とりわけ『ナルチスとゴルトムント』について、父権と母権の相克と母権の復権を軸に考察する。

Ⅲ　父権と母権とのはざまで

『車輪の下』は全体がタイトルのない七つの章に、『ナルチスとゴルトムント』は同じくタイトルのない二十の章に分けられている。以下、各章の内容に沿った小見出しをつけたものを確認しておきたい。

『車輪の下』
第１章　ハンスの受験勉強と合格
第２章　ハンスの夏休み
第３章　マウルブロン神学校入学　ハイルナーとの友情と絶縁
第４章　同級生の事故死とハイルナーとの友情復活
　　ハイルナーの逃亡と退学
第５章　ハンスの挫折と退学
第６章　徒弟修業の始まりと初恋
第７章　失恋とハンスの死

『ナルツィスとゴルトムント』
第１章　父と息子
第２章　夜の小冒険
第３章　教師ナルツィスと生徒ゴルトムントの友情
第４章　母を思い出したゴルトムント
第５章　ナルツィスの修行
第６章　リーゼとの出会いとマリアブロンとの別れ
第７章　放浪への旅立ち
第８章　老騎士の館と美しい姉妹

16) Vgl. Peter de Mendelssohn, Von deutscher Repräsentanz, Prestel Verlag, 1977, München, S.257f.

第９章　再び放浪へ　農婦の出産とヴィクトルとの出会い　ヴィクトルの死
第10章　聖母像とニクラウス親方との出会い
第11章　使徒ヨハネ（ナルツィス）像の完成
第12章　親方との別れ
第13章　三度目の放浪とペスト
第14章　かりそめの家庭とペストの蔓延
第15章　親方の死とアグネスとの出会い
第16章　囚われのゴルトムント
第17章　ナルツィスとの再会
第18章　マリアブロンへの帰還と福音史家像の完成
第19章　マリア像の完成と最後の放浪
第20章　最後の帰還とゴルトムントの死

『車輪の下』において、主人公ハンスはすでに母を無くした一人っ子の少年であり、父親と住み込みの家政婦のいる家庭に育っている。マウルブロン入学時に母親との別れの寂しさをこらえる他の少年達に比べ、父親との別れはかなりそっけない。神学校内の生活は完全に男性社会である。それは、ラテン語学校でも、徒弟奉公に入った機械工場でも同様である。未熟な年下の少年をからかう少女エマの存在を除いて、ここには女性の存在がほとんど見られない。ただ、ハイルナーとの友情の中で、少年同士の愛情が描かれる場面がある。また、早熟なハイルナーは、ハンスにとって女性という未知なる世界を垣間見させる存在でもあった。唯一彼を「性」の世界に導いたエマは、彼がそこに進んでゆく間も与えずに扉を閉ざして去っていく。いずれにせよ、女性への強い憧れと幻滅を味わったハンスは、強力な父権の下で自らの存在そのものを失ってしまうのである。

ゴルトムントも父親に連れられて、やがては修道士そして神父になるべくマリアブロン修道院にやって来る。マウルブロン神学校のように多数の生徒が同時に入学する時代ではなく、ゴルトムントは愛馬のブレスとともに修道院に残される。彼には母親の影が全く存在しない。それどころか、なんらかの理由で母にまつわる記憶を全く失った状態で、父親の希望によってこの修道院で生涯を終えることを運命づけられていたことが明らかになる。女性にかかわる彼の最初の体験は、夜にこっそり修道院を脱け出して村の少女達を訪れる仲間に加わったことであった。その折の少女との別れ際の口づけでさえも、神に仕えようとする身には許されぬ罪であると、女性への衝動を抑えるゴルトムントに、母親の記憶を呼び覚ましたのがナルツィスであった。母の姿を思い出すにいたったこと自体がすでにゴルトムントにとっては大きな衝撃であり、ナルツィスは、彼の父親が妻とその息子とを自分の日常生活から消し去る意図でゴルトムントを修道院に入れたと推測する。そして、ゴルトムントの本質が俗世を捨てた禁欲的な修道士や自分のような神学者にではなく、むしろその反対に俗世の生に徹することに適していると説く。そして記憶の水面下に閉じこめられていた母の姿を思い出したゴルトムントに、「君は目覚めた。君はいま確かに君と僕との間のちがいを、母性的なるものと父性的なるものとから出てくるもののちがいを、魂と精神のちがいを見分けた。これからは間もなく、修道院における君の人生と僧の生活に進もうという君の努力はま

ちがいであったこと、君のお父さんの考え出したことであり、お父さんは、それでもってお母さんの記憶を払い落とすか、あるいはただ彼女に復讐をしようと思ったのだということがわかるだろう」[17] と言い、父の力によって封じこめられていた彼本来の生に目覚めさせるのである。そしてその言葉は、生徒でもあり友でもあるゴルトムントをその本性にふさわしい方向に導くことの意味と、そこから生じるであろう結果をすでに覚悟した上でのものであった。

その数年後、アンゼルム神父に薬草採集を命じられたゴルトムントは年上のジプシー女性リーゼと出会い、初めての性を体験する。その夜、再び彼女と会う約束を実現するために、ゴルトムントは迷わずマリアブロンを去る決心をする。その後の長い放浪と女性遍歴の始まりは、全く偶然にそして突然にやってきたのである。一人で断食と不眠の修行に励んでいるナルチスをこっそり訪れたゴルトムントは、いよいよその時が来たことを知らせる。「すべてが変わり、魔法にかけられ、すべてが意味を持ったのです。〔……〕僕はいま多くのことがわかりました。いま、この修道院にもうこれ以上留まることはないということが突然にわかったのです。もう一日もいる必要はありません。夜になり次第、僕は行きます」[18] という言葉に、ナルツィスは神の加護を祈って友を送り出すことしかできなかった。

すでに述べたように、ゴルトムントの周囲の修道士や神父、教師や校長そして修道院長も皆彼に対して好意的であり、そういう意味において彼は良き導き手に恵まれた生徒であった。とりわけ若い教師助手のナルチスが彼を正しく理解し、彼が本来進むべき道を示してくれたという点は、後年のヘッセが学校批判に傾きすぎたと言う『車輪の下』の場合と顕著な対照を見せている。しかも、かつてヘッセ自身が発作的に脱走し、ハイルナーが逃亡騒ぎの後に堂々と退学したマウルブロン（マリアブロン）との別離を、教師であり友であるナルチス自身がゴルトムントに促したことには、そこを去った後にさまざまな困難にあふれる人生を切り開き、詩人として成功を収めた作者ヘッセの確信的な自己肯定が存在すると言えるだろう。

その後のゴルトムントの生活を彩るのは、放浪者の自由気ままな生活と、数々の女性との情事であるが、すでに述べたように、重要なことは彼がそれらすべてを視覚的に記憶の中に留め、蓄積していくことである。しかも、ゴルトムントは彫刻家の修行を続けていくあいだに、それらすべてがイヴ像の中に表現されていくであろうという強い予感を抱いて、「ジプシーの女リーゼの表情、騎士の娘リューディアやほかの多くの女たちの表情が、あの根源的な像の中に取り込まれていったのである。そして愛した女たちの顔のすべてがこの像を作るのにかかわっただけでなく、すべての感動、すべての経験とすべての体験がその形成に加わり、表情を与えた」[19] という認識に達する。また、彼の情事の多くは夫や家庭を持つ女性との関係であったが、そこには汗水を流して仕事にいそしみながらも、家長として家族を支配する定住者の男たちへの揶揄も読み取られる[20]。旅の道連れであった放浪学生ヴィクトルを、我身を守るために殺すことになった後、茫然と森や野をさまよい危うく命を落とすと

17）Jubiläumausgabe zum hundertsten Geburtstag von Hermann Hesse, 6. Band, Suhrkamp Verlag, 1982. Frankfurt a. M. , S.66.
18）Ibid., S.82
19）Ibid., S.166.
20）Vgl., ibid., S.169 und S.189f.

ころであった彼を救ってくれたのも、かつての情事の相手であったそのような女性たちの一人である。彼が女性の愛に恵まれる男でなければ、彼の放浪はずっと困難なものとなったであろうし、とっくに命を失っていたかもしれない。

やがて、一日の宿を乞うた修道院で懺悔を済ませたゴルトムントが、その後の彼の人生を決定づける一体の聖母像に出会い、その像の製作者であるニクラウス親方の下で弟子となり、彫刻家としての才能を開花させるにいたったことはすでに述べたとおりである。ゴルトムントは親友ナルツィスの姿を使徒ヨハネの木像として完成し、親方の美しい一人娘リズベートの夫となってその後継者になることを望まれるまでの評価を受ける。しかしゴルトムントの心には、たとえ親方のようなすぐれた芸術家になろうとも、封建社会における名誉ある市民として生きるために自由を犠牲にし、自らの人生に妥協を強いることへの疑問がすでに芽生えていた。「〔……〕果たして、ただ体験され、見られ、愛のうちに受け入れられるだけでなしに、最後の細かな点にいたるまで、確かな名人芸でもって作られているこのような美しいものを、いつか作り出すためにのみ、自由を犠牲にし、大きな体験を犠牲にし、自分の全生涯を芸術のために捧げるということは、苦労のしがいことであろうか？」[21] と、あらためて親方の聖母像を観察し、その精緻な美しさを実現するために必要な生活を思いながらゴルトムントは問う。そして、今の彼が最も欲している像を彫ることが不可能であるゆえに、これまで犠牲にしてきた自由を再び手にし放浪の旅に出ることを心から願って言う。「ああ、旅よ、ああ、自由よ、ああ、月に照らされた荒野よ！〔……〕この町の、定住している人々の間では、すべてがお手軽に安上がりで、恋さえもがそうなのだ。そんなものはもうたくさんだ。突然彼はそれらにつばを吐いた。ここでの生活は意味を失ってしまった。それは髄のない骨だった」[22]。このように、結局定住者の生活に甘んじることのできないゴルトムントは、親方からの破格とも言える申し出を断わり、かろうじて怒りをこらえた親方に即刻工房を出て行くよう命じられる。かつて自叙伝のラテン語訳の指導を依頼され滞在を求められた老騎士から、彼の二人の娘を誘惑したために居館を追放された時とは異なる次元ではあるが、ゴルトムントは三度「父親」と決裂し、強力な父権との相克の果てに放浪の旅に出て行くことになる。しかも今回はその父親に留まることを強く望まれ、彼が大きな関心を抱いていた一人娘を妻とすることまで許されたにもかかわらず、彼自らが放浪の道を選んだ結果であった。放浪者の自由を放棄し、ギルドに属する親方となって安定した地位と家庭をもつことよりも、放浪の旅を、親方の誇り高い美しい娘を妻とすることよりも、彼を産み、育み、導いてくれる母の像に従うことを彼は選んだのである。「いずれにせよ、いまは彼女（母）に従わねばならず、彼女に自分の運命をゆだねなければならない。彼女は僕の運命の星なのだ。〔……〕いまやもう、決断のときは目の前に迫っている。すべては明白になった。芸術は美しいものであるが、それは女神でもなければ、目標でもない。僕にとってはそうではないのだ。僕は芸術にではなく、母の呼び声にのみついて行かねばならない」[23] という彼の決意が揺らぐことはなかった。

そもそもゴルトムントが彫刻家をめざした背景には、彼の視覚にとどめられた数々の像

21） Ibid., S.178.
22） Ibid., S.190.
23） Ibid., S.187.

を、その移ろいやすさ、儚さ、「無常さ」（Vergänglichkeit）から救い出し、永続する形の中に残そうという願望があった。ニクラウス親方をはじめて訪れたその日すでに、「ひょっとすると、すべての芸術の根本は、そしてまた全ての精神の根本も、死に対する恐怖かもしれない、と彼は思った。我々は死を恐れ、はかなさに震える。〔……〕我々が芸術家として、像を作ったり、あるいは思想家として法則を追求したり、思想を公式化するのは、それはまさに、大きな死の舞踏から何かを救い出し、我々自身よりも長く生き続ける何かを残そうとするためなのだ」[24] ということを彼は考えていた。また、後に再会したナルツィスが、「ところで、芸術が君にもたらしたもの、意味したものは一体なんだった？」[25] と問うと、「それは無常の克服だった。僕は人間生活の愚行や死の舞踏から、何かが残り、生き延びることを知った。つまり芸術作品だ。〔……〕なぜならそれはいわばはかないものを永遠化することなのだから」[26] と答えている。まさにゴルトムントは、儚いものに永遠の命を与え、無常を克服するために、親方に入門を乞うた時に心の中に残されたナルツィスの姿を描き、職人仕事の合間に騎士の末娘である若いユーリエの粘土像を作り、若いナルツィスその人を木像に彫り出したのである。彼にとっては芸術作品こそがこの世の無常さに対抗できる存在であり、ゴルトムントはそのような作品を生むために女性との愛の次に重んじる自由を犠牲にし、職人仕事の修行に取り組んだのであった。しかし、ヨハネ像の次に彼が作品として残したいと考えていた「母」の像には、未だ手をつけられる段階に彼自身が達していなかった。そこにたどり着くためにはまだ多くの時間が必要であり、再び長い放浪の旅に出る必要があることを彼は知っていた。「はるかな、神聖な像が、一つあり、それをいつかは作らなければならないと思っていますが、しかしいまはまだ作ることができないのです。それを作ることができるようになるためには、もっと多くの経験や体験を積まなければなりません。ひょっとすると、三、四年でできるかも知れません。あるいは十年、もしくはもっとかかるかも知れませんし、まったく作れないかも知れません」[27] と語るゴルトムントの真意は、市民生活を営む芸術家、ニクラウス親方には伝わらなかったのである。

Ⅳ　マリアブロンへの帰還と母への回帰

二度の定住生活への試みをはさんだ三度目の放浪は、まさにこの世の無常さを味わいつくすものとなった。中世ヨーロッパ世界をたびたび襲い、その発展を妨げ、時には後退させるほどの猛威をふるったペストの発生である。ペストの蔓延で無秩序となった世界の片隅で、かりそめの定住地を築くという逆説的な「故郷ごっこ」（Heimatspiel）の生活も、結局は仲間の一人レーネの感染と死で終わりを告げる。ペスト患者を人間として扱うことを忘れた

24）Ibid., S.158.
25）Ibid., S.272f.
26）Ibid.
27）Ibid., S.183.
28）『ナルツィスとゴルトムント』刊行後にドイツの政権与党となったナチスは、ユダヤ人迫害の描写を削除することを本書のドイツにおける販売の条件としたが、ヘッセがこれを拒絶したため、この作品はナチスの禁書リストに入れられたという経緯がある。

人々のあさましい姿やユダヤ人を街ごと焼き殺すという暴挙[28]をその眼で見、恐怖を忘れるためにつかの間の享楽に身を委ねる人々の仲間に加わるなど、この世の地獄を体験しながらもなんとか生きのびることのできたゴルトムントは、彼がその目で見たすべてのものを形として残すために、もう一度ニクラウス親方の下で彫刻の腕をふるおうと工房のある司教座都市をめざす。ところが、ようやくその町にたどり着いたゴルトムントが知ったのは、親方の死と、一命はとり止めたもののペスト感染によって美しさを失ったリズベートの姿であった。

目標を失い、この世の無常さの前に消えていったものたちを思い慟哭するゴルトムントに、かつての下宿先の娘マリーが声をかけてくれる。子供心にもゴルトムントに思いを寄せていた彼女のおかげで、つかの間の落ち着き先を見つけた彼であったが、たまたま街で目に触れ彼の心を魅了した、司教が逃げ出した後の町を支配する総督の愛人アグネスを誘惑することに命を賭けようとする。首尾よく彼女の関心をひくことに成功したゴルトムントは、彼女の手引きで総督の館に入り素晴らしい愛のひとときを享受する。しかし翌日再び館に忍びこんだ彼を待っていたのは、総督の罠に陥って捕えられ、死の宣告を受けるという運命であった。ここまで彼を導いてきた女性、産みの母でもある「原母」（Urmutter）がとうとう彼を死の淵にまで導いたのである。翌朝に処刑されることとなったゴルトムントは、暗闇の中で今はまだ死ぬことができないという思いをこめて、心の底から母に訴える。「『ああ、お母さん、ああ、お母さん！』〔……〕彼がこの呪文のような名を口にすると、彼の記憶の底から、一つの像が、母の像が答えた。それは、彼の思考や芸術的夢想によって描かれていた母の像ではなく、彼自身の母の像であった。〔……〕彼は嘆きをその像に向けた。死ななければならないという耐え難い苦悩を彼女に向けて、泣いて訴えた。彼は彼女に身をゆだね、森と太陽を、目と手を、彼の全存在と全生命を彼女に返した」[29]。この世の生を失うことが母のもとへと帰ることであるという考えが、すでにこの時点で示されていることは重要である。だが独裁的な支配者という最も強力な父権との戦いに破れ、生命の危機に立たされたゴルトムントではあったが、彼の生への意欲が戦いの道を選ばせる。彼の計画は、最後の懺悔と聖餐のために牢を訪れる約束をしてくれた神父を殺して逃げるというものであった。しかし、翌朝彼のもとにやって来た神父は、マリアブロンの修道院長となったナルツィスその人であった。彼は恩赦を受け、今はヨハネス院長となったかつての友に連れられ、数十年ぶりにマリアブロン修道院に帰ることができる。

マリアブロンにおけるゴルトムントの生活は、半ば客人として、また半ば修道院のために彫刻を作成する芸術家としてのものであったが、ニクラウス親方の下にいた頃とはちがい、女性たちとの情事、賭け事や酒宴などを楽しむ放埒な生活のかわりに、修道院に住む者にふさわしく、祈りを捧げ、清貧に甘んじる日々を送っていた。ナルツィスに懺悔を行った後には、「緊張と不安と満足感に富んだ仕事の只中にあって、毎朝毎晩、簡単ではあるが心をこめて行ったこの精神的なお勤めによって彼は一日の興奮から解放され、全存在がより高い秩序へと引き戻され、創造の危険な孤独から引き離され、子どもとして神の国へ迎え入れられ

29） Jubiläumausgabe zum hundertsten Geburtstag von Hermann Hesse, 6. Band, Suhrkamp Verlag, 1982. Frankfurt a. M., S.257f.
30） Ibid., S.289.

るのを感じた」[30]。そういう毎日を送りながら、彼はニクラウス親方やかつてのダニエル修道院長の姿を福音史家たちの像に彫り、ダニエル院長の像が完成すると一人ナルツィスにだけにそれを見せた。ナルツィスはゴルトムントの中の芸術家という存在を賞賛し、彼らが本当の意味での友同士となりえたことを心から喜んで言う。「友よ、これを見せてくれることで、君は僕に豊かな贈り物をしてくれた。君は僕に、ただ我々のダニエル院長を再び与えてくれただけでなしに、初めて君自身をすっかり開いて見せてくれたのだ。いま君がどんな人間であるかわかった。〔……〕ああ、ゴルトムント、ついにこういうときが来たのだね！」[31] それは彼らの友情が、知と愛とが等しく手を取りあった瞬間であった。

福音史家たちの像に続いて、ゴルトムントは初恋の相手とも言えるユーディットの姿をマリア像として完成する。しかし、彼の最大の目標である「母」の像を作り出すことはいまだかなわない。やがて、ゴルトムントは自分の老いに気づき、修道院という完結した世界に安住するうちに、あたかもかつてのニクラウス親方のようになってしまっている自分の姿に愕然とする。もはや若い女性の心を虜にする力が消えているにもかかわらず、彼は最後のそして人馬転倒で致命傷を負う結果となる旅に出ていく。実際は彼が命がけで求めたアグネスを再び訪れるための旅であったが、美しいアグネスは老いたゴルトムントをもはや相手にせず、あっけなくしかも惨めな結果に最後の旅は終わってしまった。これまで、彼を導き続け、たびたび危機を救い、時には危険に陥れた女性たちが去っていった後に残った存在、それはまさに母の像であった。瀕死の重傷を負って再びマリアブロンに帰ってきたゴルトムントの最期は、その母に自己の「全存在を返す」という形で描かれている。

> 母の像を作ることが、何年も前からの僕の一番好きな、そしてもっとも神秘に満 ちた夢だった。それはすべての夢の中でももっとも神聖なもので、僕はいつも愛と神秘に満ちたその姿を胸に抱いて歩き回っていた。ほんのこの間までは、彼女の像を作らずに死ぬかもしれない、と考えると、まったく耐え切れなかったし、自分の人生が無駄だったと思えただろう。それがどうだろう、彼女との関係はなんと不思議なことだろう。僕の手が彼女の像を作る代わりに、僕を形づくるのは母なのだ。彼女が両手を僕の心臓のまわりに当て、心臓を引き抜き、僕を空にするのだ。彼女は僕を死の方へ誘う。すると僕と一緒に僕の夢、美しい像、偉大なる人類の母イヴの像も死ぬのだ。まだ僕にはそれが見える。もし僕の手にまだ力があれば、それを形づくることができるのだが。しかし彼女はそれを望んではいない、僕が彼女の神秘を眼に見えるものにすることを彼女は望んでいない。むしろ彼女は僕が死ぬことを望んでいる。僕は喜んで死ぬ。母がそれを容易にしてくれる[32]。

こうしてゴルトムントは友に看取られながら息を引き取るのであるが、最後に知性の人ナルツィスに対してつぎのような決定的な言葉を残していく。「しかしナルツィス、母を持たないとすると、君はいつかどうやって死ぬつもりなのか？　母がいなければ愛することはできない。母がいなければ死ぬことはできない」[33]。この言葉の二日後、意識を失ったまま

31）Ibid., S.293.
32）Ibid., S.315f.
33）Ibid., S.316.

ゴルトムントはこの世を去る。そのあいだ彼のそばを離れずにいた修道院長ヨハネスにとって、「ゴルトムントの最後の言葉は、彼の胸の中で火のように燃えた」[34] という文で物語りは終わっている。ゴルトムントは親友ナルツィスに彫刻作品だけではなく、母の存在の灯を遺していったのである。

むすび

これまで、音楽家や画家といった芸術家を主人公とした作品を発表してきたヘッセが、この作品では放蕩者の放浪彫刻家と修道院に定住する聖職者、カトリックの学僧という二人の人物を主人公として対置している。その一人であるゴルトムントにとって、二体の聖母像が、すなわち、一度は他人の手になる作品を見ることで、もう一度は自分の手で作り上げることによって、放浪生活から定住へ、また定住生活から放浪へと、人生の転機を与える存在になっていることはこれまでに確認したとおりである。同じキリスト教であっても、プロテスタントにおいては聖母や聖人は信仰の対象とはならない。それゆえヘッセが聖母崇拝に寄せて、宗教改革以前の中世ドイツを作品の舞台に選んでいることは間違いないであろう。また、ニクラウス親方のモデルとされる彫刻家リーメンシュナイダーは、やはり親方が住む町のモデル、ヴュルツブルクの市長まで勤めた人物である。彼は宗教改革期の混乱の中、ドイツ農民戦争に際して農民側に加担したため、逮捕、投獄され、激しい拷問を受けたと伝えられている。農民戦争という惨劇がペストに置き換えられてはいるが、ゴルトムントが放浪するドイツの森や草原、村や町は、クヌルプがさすらう南ドイツの風景と変わらない。したがって、ここで描かれる中世ドイツはあくまでも観念的な世界であり、ヘッセ文学に特有の作者自身の内面的現実世界を描くために選ばれた時代設定であると考えられる[35]。同様に、ヘッセがわずか半年余りしか過ごさなかったマウルブロン神学校も、時間を超越した小宇宙として、あるときは過去に、またあるときは未来に時間を移し、『ナルツィスとゴルトムント』や『ガラス玉演戯』の中に描き出されている。ヘッセ自身は、こうした閉じられて完結した小世界に定住することと、そこから脱け出して外の世界を放浪することとのあいだを行きつ戻りつする人生によって、創作という行為と創作するための力の獲得を実現しているように思われる。

最後に、マリア像やイヴ像によって代表される根源的な母性像に導かれながら父権と対抗するゴルトムントの生き方には、ギリシア・ローマの文明の明澄な世界から隠された地母神の系譜に繋がる信仰が根底に存在することを指摘しておきたい。この点については、バッハオーフェンが掘り起こした「母権」（Mutterrecht）とヘッセとの関わり[36] に教えられると

34） Ibid.
35） Vgl. Peter de Mendelssohn, Von deutscher Repräsentanz, Prestel Verlag,1977, München, S.251.
36） Vgl. Johann Jakob Bachofen, Das Mutterrecht, Suhrkamp Verlag, 1984, Frankfurt a. M., S.425f.
Ｊ・Ｊバハオーフェン著、吉原達也・平田公夫・春山清純訳：『母権制（上巻）』、1992年、白水社、664／665項参照。
37） Hrsg. von Volker Michels, Über Hermann Hesse 1. Band, Suhrkamp Verlag ,1979, Frankfurt a. M., S. 212.

ころが多かった。その一方で、ヨーロッパ文学の代表的研究者であるＲ・Ｅ・クルチウスが、『ナルチスとゴルトムント』を「徹頭徹尾ドイツ的な作品である」[37] と評しているが、もともとロマンス文学の専門家であるクルチウスが、はたしてギリシア・ローマの古典古代をもふまえて、この作品を「ドイツ的」と理解しているのか、今後の研究の課題としたい点である。

付　記

平成16年春より一年間の海外研修の機会を頂戴し、ドイツ、バーデン＝ヴュルテンベルク州の州都、シュトゥットガルトに滞在させて頂いた。シュトゥットガルトの周辺に点在する小さな町のひとつにヘッセの生地カルプがあり、さらにマウルブロン修道院もその近郊に存在する。秋のある晴れた日曜日、筆者は電車とバスを乗り継いでおよそ二十年ぶりにマウルブロンを訪れた。現在も古典語と音楽の教育を柱とした寄宿制のギムナジウムとして使われているかつての修道院は、ドイツ最古のシトー派修道院の建築が良好に保存されており、1993年に世界文化遺産として登録された。そのせいもあってか、一人歩きの自由な見学は認められず、時間を決められたグループに入り、ガイドに案内されて見学するシステムとなっていた。くわしい説明のついた案内掲示はありがたかったが、訪問者が気ままに見て回れる場所でなくなっていたのは残念であった。前回筆者がここを訪れたのはちょうどクリスマスの頃で、地元の人々が集まる礼拝に参加し、外に出ると冬のドイツ名物グリューヴァインをボランティアの人々によって振る舞われた。冷え切った手にありがたく受け取ったものの、車で来ていることに気づいて返そうとすると、初老の親父さんが巨体をゆらしながら「俺だって自動車だよ。こいつは酒じゃないんだから」と笑って受け取ろうとしなかったことを思い出す。その当時からするとローカル色はかなり薄められた感があるものの、訪れている観光客はドイツ人ばかりであるところが、他の有名観光名所とは一味違っていた。本論文は、こうした二十年を隔てた二度目のマウルブロン訪問の体験から生まれた筆者の研究のマイルストーンである。そしてこれを、海外研修の機会を与えて下さった皆様へのささやかな感謝のしるしとさせて頂きたい。また、テキストからの引用文については、筆者も翻訳に参加した、日本ヘルマン・ヘッセ友の会・研究会による新訳を用いたことをお断りしておきたい。

使用テキスト

Jubiläumausgabe zum hundertsten Geburtstag von Hermann Hesse, 1. Band und 6. Band, Suhrkamp Verlag, 1982. Frankfurt a. M.

参考文献

Peter de Mendelssohn, Von deutscher Repräsentanz, Prestel Verlag, 1977, München.

Johann Jakob Bachofen, Das Mutterrecht, Suhrkamp Verlag, 1984, Frankfurt a. M.
Hrsg. von Volker Michels, Über Hermann Hesse 1. Band, Suhrkamp Verlag, 1979, Frankfurt a. M.
Martin Pfeifer, Hesse Kommentar zu sämtlichen Werken, Winkler Verlag, 1980, München.
Hrsg. Von Ursula Apel, Hermann Hesse: Personen und Schlüsselfiguren in seinem Leben 1. Band, K. G. Sauer Verlag, 1989, München.
Ｊ・Ｊバハオーフェン著、吉原達也・平田公夫・春山清純訳：『母権制（上巻）』1992年、白水社